

「はあ…、サクヤ君、ここ、舐めてもいい？」

いつの間にかTシャツごとパーカーは顎の下までたくし上げられて、聡の長い指が直接サクヤの胸の突起を撫でている。ただの好奇心だった。指でだけでもびりびりとしたじれったい感覚が、舐められるとどうなるのか、怖いような経験してみたいような純粹な好奇心の方が勝ってしまった。

「…う、ん…っあー！」

そして、そんなサクヤの気持ちを見透かしていたかのように、待ち構えていたように差し出されていた熱い舌がサクヤの返事と同時に突起へしゃぶりついた。丁寧に愛撫されたサクヤの乳首は真っ赤に立ち上がりしこりを持っている。聡はそれを欲情した眼で見つめながら、円を描くように嘗め回したり、時には舌ではじくように上下にべろべろと舐めあげるとその振動がびりびりと快感となって全身を駆け巡る。

「あっ、…んう、はあッ、あッ」

「はあっ、…サクヤ君のおっぱい、おいしいよ…」

さっきまで余裕の大人の様に見えていた聡が必死に自分に覆いかぶさり身体を嘗め回している状況は倒錯的で、より一層二人を興奮させる。

びんびんに勃ち上がった左右の乳首を、片方はすすり上げられるようにじゅるじゅると吸われながら、もう片方を指で甘くゆっくりと圧迫されて摘まれた瞬間、サクヤの頭の中がチカチカつと光り全身がびくびくと大きく痙攣した。

「あ…ッ！ー！」

既に精通していたサクヤはこの感覚を知っていた。一人で自慰行為をしていた時に達していたあの感覚だ。しかし今まで自分でしてきた経験よりも味わったことのない深い快感だ。

「ん、乳首でイケたね。えらいよ」

初めての感覚に戸惑いながらも、聡は笑うこともなく労うように優しく顔中にキスをする。「もっと気持ちよくなるうか？」

そういうと今度は聡の頭がゆっくりと下に向かって腹にキスをしてゆく。大きな大人の手の平が、先ほど達したばかりの股間のふくらみの上を優しく包み込む。

「はうっ」

ハーフパンツ越しに緩く握られると布越しに出された精液が中でぐちゅりつと微かに音をさせる。恥ずかしさと達したばかりの敏感なペニスをやわやわを揉まれると、また徐々に芯を持ち始めてしまう。

「あ、…あ…きもち」

「おちんちん、もっと気持ちよくする？」

卑猥な言葉を投げられるが、サクヤもまた熱を開放したい一心に思考が幼くなってしまふ。

「うんっ、おちんちんっ、もっとしてっ」

ハーフパンツは剥ぎ棄てられ、ボクサーパンツはそのままに手をするりと入れられると筒の様に包み込まれ上下にしごかれる。

「おちんちん気持ちいい？」

「あっあっ、はあっきもちっ、はうう」

出された精液を絡めながらぬるぬるこすられると一気に射精感が高まり、また達しそうになる。パンツの中はぐちゃぐちゃになっているが、なぜかそれもまたサクヤを続々とさせているのだから不思議だ。

「かわいい、腰いっぱい振っちゃってるね。」

聡の言う通りサクヤは足を大きく開き、ペニスをしごかれる動きに合わせて自らも激しく腰を振ってしまっていた。

「あっ、腰っ、とまんない、はあ、あ、いっっちゃう」

聡は射精を促す様に「いいよ、いっぱいイって」と甘やかしながら、手の動きを速めると、サクヤはあっけなく全身を震わせながら射精をした。〰度の絶頂を迎えた身体は満身創痍

で息も絶え絶えにぐったりとしている。聡はサクヤの身体を後ろから抱え込みサクヤの身体をまんぐり返しのような格好にさせ、両足が閉じないように自身の足に引っ掛けさせた。